広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

秋田にガラス文化を根付かせたい。その思いを形に。

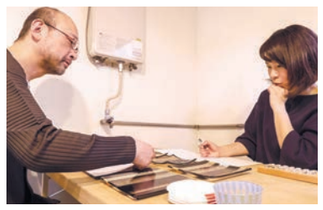
鎌田 祥子　秋田県／ガラス工芸作家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。


エリア・コンサルティングにて

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。秋田県選出の匠、ガラス工芸作家・鎌田祥子さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

1月18日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

秋田のガラスをたくさんの人に知ってもらいたい

鎌田さんが、ガラス工芸に出会ったのは、秋田公立美術工芸短大（現、秋田公立美術大学）在学時。当初は、陶芸志望だったが、授業で吹きガラスの制作を見学し「窯の中でどろどろに溶けた高温のガラスが、キラキラと涼しげなものに変わっていく」様子に心を奪われ、その魅力にのめり込んだ。

卒業後、同級生の多くは県外の作家のアシスタントになったり、ガラス工場に就職したりしたが、鎌田さんは、自らの表現を追求しようと地元に残り、同短大に勤務しながら制作を続けた。2005年秋田市に「硝子工房窯硝」を開設。開業当初は「ガラス工芸って何？」「ガラスの器がどうしてこんなに高い値段なの？」と言われたこともあったが、最近では県内にガラス工房も増えてきて、そのような声も聞かれなくなった。鎌田さんの工房のアトリエには、自分の作品とともに、同じ仲間のガラス作家の作品も展示・販売されている。

「現在、秋田ではガラスの文化を根付かせようという動きがあります。私が秋田に残り、ガラスを続けているからこそ出来ることは何かを考えた際に、今回の匠プロジェクトに応募して、より多くの人に『秋田のガラス』を知ってもらうことでした。私の作品を通して、『秋田のガラス工芸』を認知してもらうのと一緒に、秋田県のガラス文化を知ってもらうきっかけになればと思います」

鎌田さんの制作風景

「硝子工房窯硝」の外観

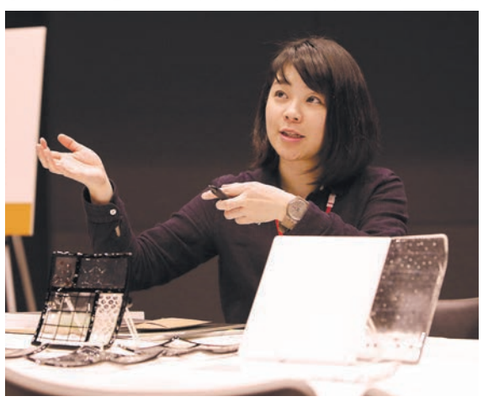
日常の景色から生まれる発想

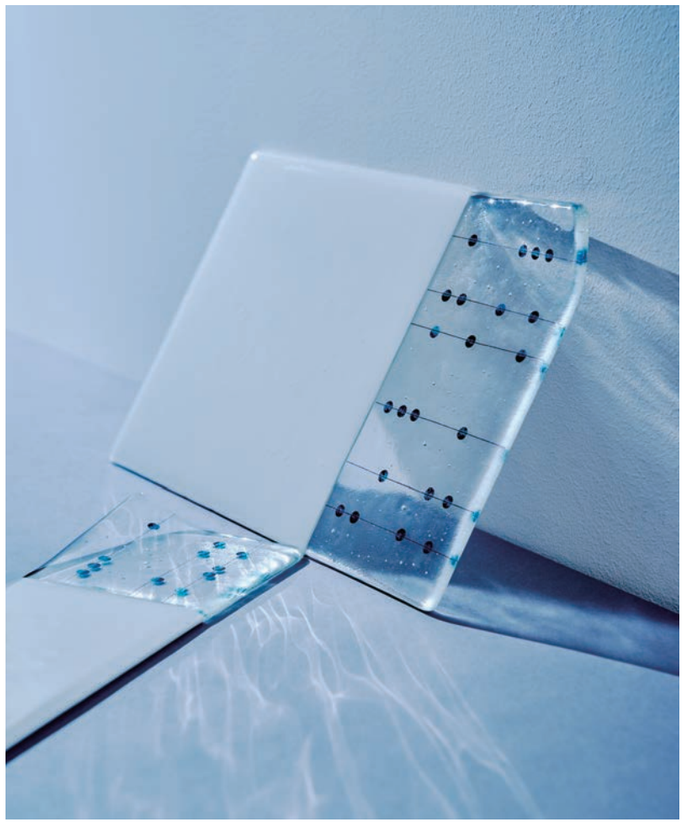
日本家屋の欄窓からヒントを得て、黒と透明のガラスを格子状に組み合わせて制作したプレート（お皿）「mado」。白いお皿の縁の一部を朱くしアクセントを出した「いわひ（祝い）プレート」。鎌田さんのガラス作品は、普段の暮らしの中でも使えそうでいて、どこか懐かしく見る人の目を引き付ける。

鎌田さんの制作したプロダクトは「ケシキ　ノ　マド」。以前展示会でmadoを見たお客様から「窓から見た田舎の風景のようだ」と言われたことがあり、その一言からこの作品の新しい一面が見え、着想を得たそうだ。

鎌田さんが制作する際に用いるのは、キルン（窯）ワークという技法だ。思い描いたデザインに合わせて、板ガラスを切りだし、それを組み合わせて、窯で熱を加えたり、変形させたりする。完成までには時間はかかるが、「ガラスという素材が持つ美しさと造形美を両方表現できるのが特長」と、この手法を選んだ。

従来のmadoのエッセンスを取り入れながらの新しい試みに、サポートメンバーからは、お皿の模様を綺麗に見せるため、くぼみの部分をなくしたフラット（平ら）で、モダンな形のプレートを制作してみてはどうかとアドバイスを受けた。だが、平らにすることで、お皿の模様は綺麗に見えるが、同時に平べったい印象にもなりガラスの持つ浮遊感が表現しにくくなる。様々な試行錯誤の上、お皿の透明な部分のふちを一カ所だけ浮かせ、また黒色だった部分を白色にすることで、浮遊感と「雪のような柔らかい印象」を出すように工夫した。完成した「ケシキ　ノ　マド」からは、これまでの作品にない斬新な形とともに、白と透明のガラスの中から浮かび上がる金属片の模様が「窓から見える雪景色」も連想させる。


バイヤーと商談中の鎌田さん


完成プロダクト「ケシキ　ノ　マド」
お問い合わせ先／硝子工房窯硝 TEL018-838-0707 http://www.kamasyou.net

「いつもなら制作する時は、日常での使いやすさを考慮した形を制作しますが、今回はフラットでモダンな形に挑戦してみました。料理を盛り付けるだけで特別な感じが出るように、凝った料理の盛り付けや飲食店でも使って欲しいです」

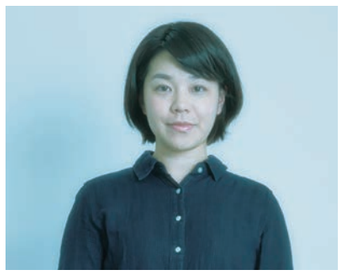
作品のプレゼンをする鎌田さん

他県の匠の方々から色々と刺激

鎌田さん自身、今回の匠プロジェクトに参加して、ガラス工芸の新しい切り口、取り組み方、考え方が発見できたという。また今まで関わることのなかった県外の作家、バイヤーとも出会うことができて、作品に興味を示してくれたり、レクサス秋田での作品展示や県外の展示会の出品のお話しもあったり、手応えを感じているようだ。

「匠プロジェクトで、作品を作るのは大変でしたが、新しい発見もあり楽しかったです。また他県の匠の方々からも、色々と刺激を受けました。今後の目標は、これからも秋田でガラス工芸を続けていくことです。向き合っていくのは、たった一つの素材かもしれませんが、今回のように新たな発見や出会いが生まれていくのは面白いと思うので、ずっと続けていきたいです」

レクサス秋田の展示風景


鎌田 祥子
秋田県／ガラス工芸作家

1979年秋田県秋田市生まれ。秋田公立美術工芸短期大学（現、秋田公立美術大学）でガラス工芸に出会う。卒業後同短大で勤務。様々なガラスの技法の中でキルンワークを使った作品作りに魅力を感じ、2005年秋田市にキルンワークの工房「硝子工房窯硝」を設立。主にプレートなどの器をつくる。直線的な模様、金属とガラスの組み合わせで生まれる色の変化を使った模様などが特徴。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT